

## ・南北朝時代における、天皇拉致誘拐事件。

22年7月2日  
横浜歴史研究会  
植木静山

- 暦応1 (1338) 8、北朝光明天皇、足利尊氏 (34) を征夷大将軍任じて京都に幕府を開かせる。
- 延元4 (1339) 8、南朝後醍醐天皇 (52) 吉野にて没する。後村上天皇 (12) が後継者となる。  
足利尊氏、後醍醐帝の御霊を慰める天竜寺を建てようとする。  
南朝、関東に拠点をつくるべく北畠親房卿が出向く。小田城の小田治久、関城の宗祐、大宝城の下妻政泰、春日顯国、結城親朝ら、幕府側は、高師冬らが義詮を支え、圧倒す。  
・南朝の体制 大納言、北畠親房卿、中納言、洞院実世卿、世尊寺行房卿、四条隆資卿  
・北朝は、尊氏、軍事権のもと恩賞権、守護任命権、高師直が補佐。直義、民事裁判、所領安堵、問注所、官途奉行などの諸機関など足利一門、旧幕府の法曹官僚など当てた。直義は、公家達、鎌倉以来の後家人達を大切にす。これに対して、師直は京周辺の振興勢力を重視した。幕府の方針は民政重視、京の地口銭の税改良、土倉の復活、
- 貞和1 (1345) 後醍醐帝供養、天竜寺、夢窓疎石、天竜寺船による元との六〇年ぶりの交易復活、博多商人の活躍。
- 正平2 (1346) 後醍醐帝供養の二年後、楠木正成の遺児達の三男正儀を除き長男正行 (26)、正時 (24) そして和泉の和田氏、伊勢、熊野、紀伊、摂津などの豪族が南朝のために立つ。驚いた北朝方。細川頼氏、山名時氏を楠木征伐に向かわせる。だが、八尾城、藤井寺、住吉、天王寺等で楠木勢は奮戦して細川、山名勢は大敗する。  
そこで、幕府は高師直、師泰らを出陣させる。これに楠木勢は敗れ、吉野の皇居で後村上帝に面会する。“返らじと 兼ねて思えば 梓弓なき数にいる 名をぞとどむる”  
正行らは、四條畷の戦場に向かい、正行、正時は討死し楠木勢は敗北する。
- 貞和4 (1348) 1、高師直は、軍勢をさらに吉野へ進めて、吉野の行宮を焼き払う。後村上帝は、天川の上流にある賀名生の里に避難した。この勝利で高師直の名は高まった。  
師直の屋敷は一条今出川にあったが、女癖が悪く没落した月卿雲客の姫君を囲う、塩谷高貞の妻への横恋慕、二条前関白の妹君に子供をませる……。師直の醜聞は尊氏や直義の耳にも入り眉を顰めさせたが、やがて、師直の傲慢さが、政治にまでも及んでくる。高師直は、自分の配下の者に半済 (はんぜい) 強引に通そうしたのだ。この件で上杉重能と激しい議論となった。そして師直の醜聞、傲慢が著しいので、排斥が計画される。  
この時、尊氏が鎌倉で生ませた足利直冬が京に来ており、利発な足利直冬 (23) は直義の養子になっており、この直冬を中国探題として頼の浦に赴任させていた。
- 貞和5 (1349) 旧暦5、直義は上杉重能、畠山直宗らを呼んで師直を謀殺しようと謀るが、すんでの所で師直に気づかれ、師直は一条今出川の屋敷に閉じ籠もってしまった。  
8/13 軍勢を率いた高師直の反撃が始まる。師直は、直義が逃げ込んだ足利尊氏邸を取り囲む。尊氏と師直の会談。直義を政務から身を引かせる、上杉重能、畠山直宗を越後へ配流させる。師直提案。鎌倉から義詮 (20) を呼び、足利基氏 (鎌倉公方) を鎌倉へ。  
(観応の擾乱) まもなく、上杉重能、畠山直宗が越後で暗殺される。足利直義、出家を決意する。
- 観応元 (1350) 足利直冬、西国で幕府に反旗を翻す。幕府、師直を中心に直冬征伐の準備を始める。  
11、直義は、直義党の武将を率い、高師直、師泰らを誅伐すべく京から逐電した。

- 直義は師直、師泰を討つ論旨を欲しがらる。畠山国清が楠木正儀に連絡す。これを聞いた北畠親房卿は足利政権を分裂させ、北朝を混乱させる好機と考え。南朝が論旨を下す。これには尊氏も驚く。尊氏、師直は、直義は直冬と共に西国に在ると考え、西国へ向かうが、直義は石堂義房、桃井直常、山名時氏、畠山国清、細川頼氏ら直義党は、大和にいたのだ。直義党は京を通り抜け幕府軍に追った。これを知り幕府軍は急きょ引き返す。
- 観応 2 (1351) 2/17 両軍は、『摂津（兵庫の南東部）打出ガ浜の戦い』で激突、幕府軍は大敗する。尊氏は直義の和議す。その条件は「師直、師泰の出家と、京は相当乱れているので、兄者は一日も早く京へ戻り京を立て直す事」だった。
- 2/26 その日は朝から雨、武庫川の堤の上を、尊氏を先頭に京へ馬を走らせ急ぐ長い行列が続く。突然、堤の下から上杉能憲と部下達が現われ高師直、師泰を襲いこれを討った。。京に戻った足利直義は、公職には就きませんでした。足利義詮とその執事の仁木頼章は、直義と直義党の武将を恐れていた。そして、直義の親しかった齊藤利泰が暗殺される。出家した直義だが、危険を感じ従う武将達と、北国へ向かうが更に鎌倉に向かう。尊氏は、直義を討たねばならないが、南朝をそのままにして、京を離れられない。崇光天皇とも相談し、北朝の天皇、年号などを一時的に廃止して、足利尊氏も政権を返上して南朝に降伏することで南朝と和睦する。従って南朝の年号に統一する。すなわち世に言う『正平一統』がなり、尊氏は、南朝の後村上天皇から「直義追討」の論旨を下賜される。南朝方は早速、過大な所領を要求したが、言葉を濁して北朝は応じなかった。
- 正平 7 (1352) 1/5 関東に向かった尊氏は、薩摩峠の戦いで直義を下して鎌倉に入り、直義を毒殺する。閏 2/18 には、関東では新田義宗、義興、脇屋義治らが兵をあげたし、京では、南朝軍の楠木正儀、和田正武らが足利義詮を近江に追い払う。南朝方は、東西で挙兵したのだ。2/27 には北畠親房卿、北畠頼能らが軍勢を率いて京に来て、東洞院土御門御所にいた光厳上皇、光明上皇、崇光天皇、皇太子直仁親王の四方に、世が治まらぬまで皇居を移したいとの後村上帝の意向。一台の車駕に四方を無理矢理乗せて、七条の外れで輿に乗せ京都郊外の八幡から賀名生の里に連れ去ってしまった。
- このように「正平一統」は南朝方により破れた。尊氏は新田勢を撃破したし、京でも、足利義詮のもとに土岐頼康、大高重成、佐々木道誉らが集まり南朝方を京より撃退した。
- 文和元正平 8 北朝では、天皇がいなくなってしまったので、崇光天皇の弟の弥仁親王を後光厳天皇(15)として踐祚させて、世の安定をはかった。
- 正平 12 (1357) 四方は、北朝から奪還されることを恐れて、賀名生の里、吉野、河内の金剛寺などと居場所を変えた。南朝の後村上天皇は四方に会って同情し、四方を帰すように務めたが、この計画をたて実行した北畠親房卿が許さなかった。やがて親房卿が病で亡くなり、正平12年2月に四方は5年振りでも無事に京に還幸した。
- 四方は、それぞれ仏門に入り、静かな余生を送った。
- 延文 3 (1358) 足利尊氏(54)で亡くなり、足利義詮が二代將軍となった。
- また、南朝では後醍醐帝から12歳で皇位を引き継いだ後村上天皇が、41歳で逝去されたが、その後も南朝は長慶天皇、後龜山天皇と続く。
- 北朝では、後光厳天皇のあと後円融天皇、後小松天皇と続いたが、
- 明德 3 (1392) 「南北朝の統一」三代將軍足利義満が財政的基盤を背景に、まず99代の後龜山天皇が「三種の神器」を持参して嵯峨野の大覚寺に渡す。寺がこれを御所におられる北朝6代の後小松天皇に渡す。後小松天皇がこれを受け取ることで、改めて、後小松天皇が、皇統上の第100代天皇になられることで、後醍醐帝の南遷から57年という長い歳月をかけて、南北朝時代を終わらせ、今日まで続く万世一系の皇統の世がつけられた。